

今年は「戊辰戦争 150年」 「明治維新 150年」ではない

奥羽越列藩同盟によって 新政府（官軍）から“賊軍”と呼ばれた東北の諸藩は

今年は2018年、中央では「明治維新 150年」として、政府は日本の近代化をアピールしました。しかし、明治から大正・昭和20年までは、日清・日露・日中・太平洋戦争と、日本は侵略戦争と植民地支配の歴史でした。そして、昭和20年からの戦後の昭和・平成の時代は、憲法第9条によって、日本は戦争をしていません（朝鮮戦争とベトナム戦争では、日本にある米軍基地が戦争の最前線基地になったが）。ここ東北では、「明治維新 150年」とは決して言いません。「戊辰戦争 150年」なのです。

「戊辰戦争とは、時代が江戸から明治に移り変わる節目に、薩摩藩・長州藩を中心とする新政府軍と、旧幕府・会津藩を中心とする勢力が京都の鳥羽・伏見で武力衝突した後、関東・東北・越後など各地を巻き込んだ内乱です。新政府は錦旗を掲げ「官軍」となり、対する旧幕府軍・会津藩は「朝敵」とされました。

謝罪を表明しても「朝敵」とされることに納得できない会津藩、謝罪を受け容れない新政府軍。東北・越後の諸藩は両者のあいだで揺れつつも戦争の回避を模索し、会津藩の救済を目的に仙台藩・米沢藩を中心に連携を図ります。新政府が会津藩の謝罪を却下すると、奥羽越列藩同盟を結成し、東北・越後の各地で激しい戦いが始まりました。しかし、同盟軍の戦況は厳しく、長岡城は落城し、会津若松では城下戦が繰り広げられ、同盟諸藩は次々と降伏していきました。戦後、同盟諸藩は新政府から減封や転封など厳しい処分を受けましたが、生き残った人びとは新しい時代を切り開いていきます。（「戊辰戦争 150年」新潟県立歴史博物館・福島県立博物館・仙台市博物館）」

奥羽越列藩同盟の諸藩は、戊辰戦争後、大変な苦難を味わいました。会津藩は、青森県斗南藩に転封させられ、極寒の中、荒地を開拓する生活でした。仙台藩の多くの人達は、北海道や千島列島に行き、開拓に従事しました（千島列島は日本固有の領土であり、そこには仙台藩士の血と汗と涙が流されているのです）。会津藩と一緒に最後まで戦った庄内藩は、西郷隆盛の恩情によって、厳しい処分を免れました。山形の人達は、現在も鹿兒島の人たちに対して、良い印象を持っています。一方、福島の三春藩は、新政府軍と内通していち早く和解しました。福島には今でも、「三春から嫁をもらいな」と言う言い伝えがあります。

長岡藩の家老だった河井継之助は、奥羽越列藩同盟の中心として、戦争に尽力しました。長岡城は一度政府軍によって落城した後、再度城を奪い返しました。しかし、長岡城は落城して、長岡藩の多くの人達は、会津に逃れました。越後と会津の間には、難関な峠があつて、それぞれ60里越え（実際は30里）、80里越え（実際は40里）越えと呼ばれています。継之助は戦争の負傷によって、只見町でなくなりました。長岡市と只見町には、河井継之助記念館があります。また、継之助は、司馬遼太郎の『峠』（新潮

文庫)に描かれています。

【新政府軍に対して奥羽越列藩同盟が最後まで戦った鶴ヶ城（会津若松市）】



【河井継之助の像（河井継之助博物館 長岡市）】

